

遠賀川流域通信

発行日 2009年3月15日 発行責任者 NPO法人 遠賀川流域住民の会 理事長 窪山邦彦
連絡先 NPO法人遠賀川流域住民の会事務局 電話0947-45-0594

けっこういいじゃん！遠賀川！



本会の副理事長、飯野大作氏の開会の言葉に始まり、「汚い、ゴミだらけなんて暗い窪山理事長挨拶、開催地です。ことばかり言わずに、『けっこういいじゃん！遠賀川！』で行きましょうや」として、引き続き、パネルディスカッションを開催しました。コーディネーターの依田浩敏氏（近畿大学教授）を中心に、



二〇〇三年九月二十日（土）直方市の直方中央公民館に於いて、「第九回 I LOVE 遠賀川流域住民交流会 in 直方」を開催いたしました。基調講演では「川と遊ぶ」と題して、大分県大野川より川が大好きな人「NPO法人河童倶楽部」事務局長の幸野 敏治氏に「川との楽しい過ごし方」をお話いただきました。その後、「素晴らしい遠賀川にするために」をテーマにパネルディスカッションを開催いたしました。

田上敏博氏（遠賀川河川事務所副所長）、堂地志郎氏（朝日新聞筑豊支局支局長）、楠木雅代氏（鎮西小学校教諭）、大津健志氏（九州工大情報工学部社会問題を考える会代表）、木ノ下勝矢氏（NPO法人豊前の国建設倶楽部代表理事）の5名の皆様に様々な体験談や活動内容をお話していただきました。最後の懇親会では筑後川連携クラブの駄田井先生をお迎えし、お酒を楽しみながら、シンポジウムの感想や川づくりや環境問題について意見交換し、親交を深めました。普段なかなか集まらない団体の皆さんが、直方市に集い交流会を開催できたことをうれしく思いました。



「第九回 I LOVE 遠賀川流域住民交流会 in 直方」大会宣言文

I LOVE 遠賀川の名のもとに今日まで「母なる川」に思いを寄せて早や一六年の歳月が流れようとしています。

飯塚市に端を発した清掃活動は様々な活動をよび、点から線への広がりを持つようになりました。当初は地域に限定された活動も上流域の嘉穂町から提唱された「遠賀川源流の森づくり」、下流域の芦屋町から全国に発信されているデポジット法制法の推進運動など、全国的にもまれな流域連携の環境活動が活発に展開されています。

しかし、遠賀川の自然環境は依然として息吹を取り返してはいません。今年も九州で最も水質の悪化した河川と汚名を受けています。社会経済システムがもたらす環境負荷は遠賀川に様々な影響を落としています。遠賀川は今、私たちにこれまでの暮らし方や行動のあり方を問いかけています。遠賀川は私たちに多くの恵みを与えてくれました。私たちは遠賀川から自然環境の尊さを学びました。

「遠賀川に清流を取り戻そう」とのスローガンを掲げ第七回北九州交流会で「遠賀川流域住民の会」の旗揚げ宣言をいたしました。さらに、今年の四月一層の連携活動を強化するためにNPO法人の認定を取得しました。国土交通省は平成十五年「第二期水環境緊急行動計画」の対象河川として遠賀川水系を選定しました。これによって遠賀川水系、清流ルネッサンスII地域協議会が設立され川の利用、生物の生息、環境保存、川の周辺環境、住民活動等に付いて総合的な行動計画が立案されるようとしています。

このように遠賀川も水環境対策の気運が高まりつつあります。環境づくりには人それぞれ立場に応じた責任と役割があります。あらゆる主体が一体となった時その成果は、称賛を得るでしょう。本日のテーマ「すばらしい遠賀川にするために」へ寄せられた貴重なご意見を糧に二十一世紀を託す子ども達にこの大切な財産を守り、引き継いでいくことをここに宣言いたします。

二〇〇三年九月二十日

第九回「I LOVE 遠賀川流域住民交流会 in 直方」参加者一同

遠賀川から洞海湾へ

飯塚

直方

木屋瀬

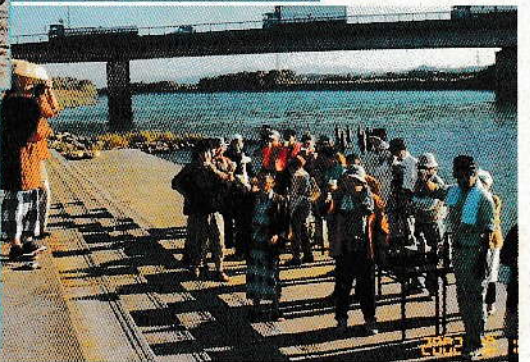
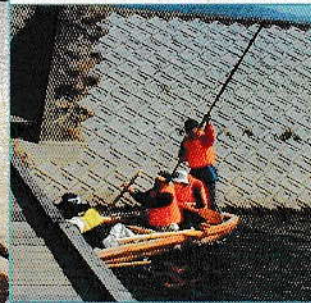
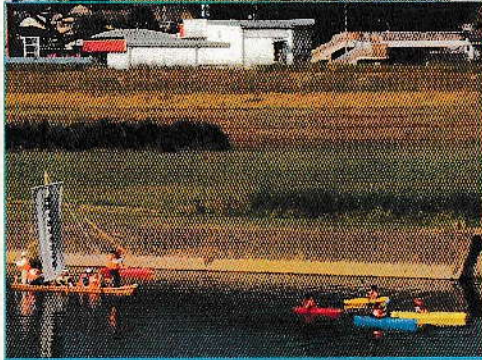
中間

若松

赤池

二〇〇三年十月十八日(土)・十九日(日)、飯塚市と田川郡赤池町から、北九州市若松区の洞海湾までの約三十キロを、かつて石炭や人々を運んでいた「川ひらた」をモデルした二隻の川舟で、遠賀川を下る「遠賀川を川ひらたで下ろう」を二日間にかけて開催いたしました

「川ひらた」はNPO法人遠賀川流域住民の会の会員団体である川舟製作研究会(久津輪勝男会長)が昨年と今年にかけて製作されたものです。全長約六メートル、幅一メートル、浅瀬でも通れるように底がひらたになつている舟です。うち一隻は北九州市八幡西区の折尾高校に展示されている石炭運搬船「五平太舟」を実物の二分の一の大きさに作られたものです。



皆で舟を漕ぎつぎ、遠賀川から洞海湾へ線となりました

川と遊ぶ

野田知佑氏を囲んで



野田氏に基調講演「世界の川を旅して」と題してお話いただきました。

二〇〇三年十月二十七日(月)、北九州市若松区若松市民会館において、日本を始め北アメリカ、ヨーロッパ、オーストラリアなど川を漕破したカヌーリスト「野田知佑氏」を講師に、テーマ「世界の川を旅して」、その後、四人のパネラーを迎え「遠賀川から洞海湾へ」をテーマにパネルディスカッションを開催しました。

野田氏は、日本中の川をヒツチハイイクでまわり、潜りまくり、世界の川をカヌーで旅し、ありとあらゆる川を知り尽くした達人です。世界の川を旅していると普段ではあじわえない体験が出来るそうです。巨大なワニに遭遇したり、熊に出会ったり、その土地の民族と生活したり、驚かされる話ばかりでした。

昔の日本の川は世界にも負けないくらいすばらしく、自然が多く、とても水が豊富で透き通っており、約三十歳先まで見えていたそうです。でも現在では、年々水は汚れ水量は減り、昔生息していた生き物は次々となくなっているという悲惨な状況になってきている、と野田氏は言います。川を元に戻すには、地域の住民と行政が連携して川づくりをしないと行けない。その例として、東京都の多摩川

・今回、遠賀川を下って、川面から遠賀川の状況を見ると、昨年に比べ、ヘドロやゴミが

・遠賀川流域住民が、川を作る、山を守る、といったことを意識することが大切。遠賀川に入って子どもが川遊びをし、サケやアユなどの魚がたくさん泳ぐ川にしていきたい。

・遠賀川流域には歴史があり、遠賀式土器など素晴らしいものが残っている。これからもアピールしていくことが大切。

・遠賀川にゆかりのある船を作っていく。今回使用した船は、昔の石炭を運んだ船の二分の一の大きさ、実物大の船を作ることが夢。

・学生達と江川を中心に清掃活動をしたい。しかし、1週間後にはゴミの山。住民の自然保護という気持ちをもっと高めてもらい、ゴミをたやすく捨てられない環境を造ることが重要。

パネルディスカッションでは原口氏を中心それぞれ視点で遠賀川についてお話いただきました。

遠賀川流域には歴史があり、遠賀式土器など素晴らしいものが残っている。これからもアピールしていくことが大切。



川と遊ぶ

少なくもあまりない。臭い地域の住民が川を大切にしなければならぬという意識が高まってきているからだと思う。遠賀川の水は、筑豊と北九州の人たちが一緒に飲んでいける水が流れている。筑豊と北九州の人々のつながりが遠賀川をもっとよくする一番の方法です。

パネルディスカッション
 テーマ：「遠賀川から洞海湾」へ
 アドバイザー：野田知佑氏 (カヌーリスト)
 パネラー：花村利彦氏 (田川郷土史研究家)
 デワンカー・パート氏 (北九州市立大学助教)
 久津輪勝男氏 (川舟製作研究会)
 窪山邦彦氏 (NPO遠賀川流域住民の会)
 コーディネーター：原口公子氏 (NPO遠賀川流域住民の会)

NPO法人 遠賀川流域住民の会 シンポジウム



田井中国土交通省遠賀川河川事務所所長よりご挨拶をいただきました

パネルディスカッション
 テーマ：遠賀川を中心に環境とボランティアを考えよう
 アドバイザー：岡本 広治氏 (NPO法人北九州国際自然大学校理事長)
 パネラー：横枕 篤氏 (田川土木事務所 土木主幹)
 長谷川浩氏 (赤池町職員)
 成富 勝氏 (九州共立大学工学部地域環境システム工学科教授)
 白土 晃氏 (飯塚ビデオクラブ)
 コーディネーター：青木宣人氏 (遠賀川源流の森づくり推進会議)



2日間の川下りの撮影の様子や苦労話をお話いただきました白土氏(飯塚ビデオクラブ)



・人と人との交流を持つことができた。皆で川を意識できたのではないかと。初めての経験で感動した。ボランティア活動として撮影を行った。何度も撮影方法を話し合った。楽しみながら参加できた。

・黒い川というイメージがあつたが久しぶりに入り感動した。メダカがたくさんいた。ゴミもあつた。クリーク状の川だと思っていたが実際に舟で下ると様々な変化のある楽しい川だと感じた。

・川を深いと感じたのは初めて、川を橋の上から見るのではなく、同じ目線で見えた景色の中に色々な発見があつた。

岡本氏は自分のスキルを磨くために勉強会を始め、それがボランティアに興味を持ったきっかけ。普通の会社では出来ないことが出来る、これがNPOだと実感。これを楽しく、これをボランティアでやるのが楽しい。

二〇〇四年一月十日(土)飯塚市のがみプレジデントホテルにおいて「ボランティア入門講座：やってみようボランティア」を岡本広治氏(NPO法人北九州国際自然大学校理事長)を講師に開催いたしました。引き続き、パネルディスカッション「遠賀川を中心に環境とボランティアを考えよう」をテーマに、昨年行われた遠賀川下りで実際に川下りに参加されたに皆様にお話をいただきました。

遠賀川の生きものたち

今月の野鳥



ミソサザイ

ミソサザイは日本にいる野鳥のなかでも最も小さい鳥ですが、非常に美しいさえずりです。秋から冬にかけて、平地におりてきて、人家の近くにも姿を見ることがあります。ウグイスがこの季節になると山から都会に降りてくるのにかよっています。鳴きも冬場のウグイスの笛鳴き「チャチャ」と同じような地鳴きをします。

みそさざい ちつというても 日の暮るる 一茶



ニッポンバラタナゴ

コイ目 コイ科
国・絶滅危惧IA類
県・絶滅危惧II類

地方名は“しびんた”産卵期になると雄は鮮やかな婚姻色、雌は二枚貝に卵を産みつけるため管を伸ばす。

2003・芦屋海岸クリーンキャンペーン

2003年9月28日(日) 100人がつどい開催

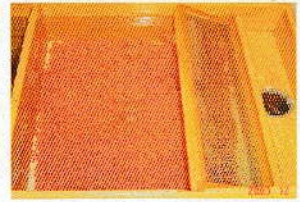


「海に面した素晴らしい景観を有する芦屋町が、残念ながら人々の出すゴミによって無残な姿になっているのが現状です。芦屋住民ではないからといって知らんぷりをする人がいる

かもしれませんが、遠賀川流域に住む私たちの責任でもあるといえます。一人ひとりが考えを変え、少しでも環境に優しい生活を送るようになれば、今の最悪な状況を抜け出せるかもしれません。子ども達に、胸を張って引き渡すことの出来る環境をもっと残していければいいと思います。(参加者の感想)

サケのふ化・飼育体験学習記

【遠賀川流域住民の会が継承して取り組む】
南国の福岡県嘉穂町では全国唯一の鮭神社があり、サケを神の使者として祭っています。この鮭神社では毎年十二月十三日に献鮭祭(けんけいさい)が行われ、サケを奉納して豊作を祈願する行事があります。
近年、遠賀川中流までサケが遡上してきたことがきっかけで嘉穂町ではふ化・飼育アドバイザーの青木宣人さんや地元の間人たちが受精卵からふ化・飼育を行い、遠賀川流域の各地で放流してまいりましたが、サケの飼育体験を通して河川の環境教育に役立つとして、今回、NPO法人「遠賀川流域住民の会」が継承して行うことになりました。



【サケはふるさとの川に四年後、帰ってくる】
体長五〜七センチに成長したサケは三月に遠賀川の各流域で放流され、放流されたサケは雨で増水した時に一気に河口堰付近まで移動し、六月には海に向かいます。日本海からオホーツク海を抜け、ベーリング海を回遊して四年後には逆の道程で生まれ育った遠賀川の「匂い」を嗅いで帰ってくるそうです。



【各地でふ化・飼育体験学習が開催】
平成年十二月十三日、鮭献祭の日に今年も国土交通省遠賀川河川事務所のご協力・ご支援を得まして四万五千個の受精卵が新潟市村上市の三面川(みおもて)から空輸で運ばれてきました。この受精卵を毎年、環境教育の一環としてふ化・飼育を行っている嘉穂町立「足白小学校」で約三百個を四〜六年生が百個ずつ振り分けて、それぞれの教室でふ化・飼育を行っています。
青木さんから水温や餌付けなどの飼育に当たって指導を受け、児童は班を編成して管理し、サケの成長を見守っています。



人達と一緒に飼育されています。
【遠賀川流域の各地で放流開始】
山田市の三月三日を皮切りに三月八日に足白小学校、十四日に稲築町(いなつき)の環境を考える会)、十五日に中間市(なにかま)三世代ふれあい会)、十九日に飯塚市(いひづか)小学校、二十日に田川郡赤池町(あか池)中学校・ひこさんがお夢の会)と飯塚市(ひらけ)子ども会・川船製作研究会)、二十一日は岡垣町(おかき)で最後の二十七日に芦屋町で放流を行います。
放流に先立ち青木さんから昔から遠賀川にはサケが帰っていたこと、サケがどのようにして帰ってくるのか、川をきれいにしないとサケなどが帰ってこないこと、ふるさとの川をもっと大事にすることなどを話して頂き、放流しました。
NPO法人遠賀川流域住民の会
嘉穂町 松岡 朝生